

[44]

氏名	すがわら よしの 菅原 慶乃
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	博第516号
学位授与の日付	2020年3月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	映画館のなかの近代—映画観客の上海史
論文審査委員	主査教授 内田 慶市 副査教授 藤田 高夫 副査 准教授 池尻 陽子

論文内容の要旨

本論文は、20世紀前半の上海における映画観客というものに着眼して、その成立を解明すべく、映画が上海に伝来した19世紀末から、中国映画の「黄金期」と称される1930年代までを対象として、(1) 映画伝来から約半世紀の間の上海における映画鑑賞の実態を一次資料にもとづいて実証的に明らかにすると同時に、(2) マナーや教養の修得を前提とする「映画鑑賞」が社会に広がりつつあった新興中間層に実践されることで、「映画観客」という均質的な社会集団が確立したこと、さらにそのような集団が娯楽の領域において社会改良やナショナリズムを遂行しようとすることでネーション・ビルディングの一翼を担っていった過程を明らかにしたものである。

本論文の構成は以下の通りである。

序章 映画観客とは誰か？

第一章 上海の遊歩者—映画観客はいかにして登場したか

第二章 「理解する」娯楽—映画説明成立史考

第三章 闇のなかの知的なささやき—肉声による映画説明

第四章 「猥雑」の彼岸へ—「健全」なる娯楽の誕生

第五章 刺激の近代—『閻瑞生』の変奏

第六章 映画館への通い方—映画鑑賞の成立

第七章 「肉感」と「健康美」のはざま—ポルノグラフィと「良き観客」

終章 映画観客史はどこへ向かうか？

序章「映画観客とは誰か？」では、従前の中国映画興行史・観客史研究に広く見られる「発展」史観が持つ問題点を整理し、この史観によって強化された映画鑑賞の「国家のイデオロギー装置」としての役割を明らかにするという本論文の目的を述べている。

第一章「上海の遊歩者—映画観客はいかにして登場したか」では、早期映画受容の主要経路である庭園・劇場・茶園、そして新式学校などの映画受容の実像を概観し、映画上映に欠かすことの出来ない近代都市の余暇活動「遊歩」について考察を行っている。

第二章「「理解する」娯楽—映画説明成立史考」では、初期の映画上映が科学パフォーマンスという教養的な娯楽として享受されたことに注目し、このことが後に、映画を「理解する」という上海独自の鑑賞美学の基礎となっていったことを論じている。特に、上海のジャーナリズムで確立した「図説」や「説明（書）」という独特の解説スタイルが、近代知を伝播するという映画の知的メディアとしての特徴を強調したことなどを考察している。

第三章「闇のなかの知的なささやき—肉声による映画説明」では、第二章で論じた印刷メディアとは異なる方法によって映画を「理解する」という鑑賞美学が実践された事例を概観している。

第四章「「猥雑」の彼岸へ—「健全」なる娯楽の誕生」では、上海における「近代的」な映画鑑賞の成立に重要な役割を果たした上海 YMCA（上海基督教青年会）による幻灯・映画上映に焦点を当てている。第一節「上海 YMCA の映画上映実践」では、「健全」な空間で静謐裏に鑑賞行為に没入するという映画鑑賞文化を確立した上海 YMCA の映画上映の実態を明らかにしている。第二節「ヘテロトピアの映画館—YMCA とその周辺」では、上海 YMCA において目指された「近代的」な映画鑑賞を市井の映画興行へと拡張した映画興行主（上海大戲院の曾煥堂、北京大戲院の何挺然、滬江影戲院の盧寿聯、孔雀電影公司の程樹仁）について詳述している。

第五章「刺激の近代—『閻瑞生』の変奏」では、中国初の長篇劇映画『閻瑞生』の成立過程を取りあげ、20 世紀初頭の上海に現れた様々な視覚メディアが、活字だけでは満足しない読者／観客たちの持つリアリティ志向と扇情への欲求を満たすことで急速に普及していった様子を明らかにしている。

第六章「映画館への通り方—映画鑑賞の成立」では、映画人や小説家の日記を紐解きながらさまざまな映画鑑賞習慣が生み出された様子を浮き彫りにした。例えば、遅刻せずに映画を見ること、映画を見る前に作品情報を収集すること、さらには見た映画を映画鑑賞記や「映画小説」などの形で翻案すること等、映画鑑賞と同時にさまざまな文化的実践や習慣が誕生し、映画鑑賞が次第に「遊歩」から独立していった状況を実証している。

第七章「「肉感」と「健康美」のはざま—ポルノグラフィと「良き観客」」では、ポルノグラフィの規制を通じて「良き国民」としての「良き映画観客」が創出された過程を扱っている。

終章「映画観客史はどこへ向かうか？」では、民国期上海で成立した静座・静謐を是とする映画鑑賞習慣が、新中国建国後どのように拡張していったのかについて、基本的な見取り

図を示している。同時に、演劇や文学など隣接領域との連動関係の解明や今後考察すべき東アジアの他の都市との比較考察の必要性を指摘し、本論文の今後の課題についても述べている。

論文審査結果の要旨

映画論や映画史、映画作品論など、映画そのものを扱う論考はこれまで山ほどあるが、本論文は、それらとは全く別の新しい観点から映画を取り扱った極めて画期的な論考である。すなわち、映画を受容する側＝「観客」に焦点を当て、その成立を紐解こうとするもので、映画研究に大きなインパクトを与える優れた論文である。

本論文の第一章から第四章までで著者は、映画に先行する絵入り新聞や幻灯などの諸視覚メディア受容状況を映面前史として詳しく論述し、伝来直後の映画上映空間が遊興と教養が交錯する独自の映画上映環境を拓いていった過程を明らかにしているが、それを特に「遊歩」と「理解する」という二つのキーワードに集約したのは見事である。観客の「静かさ」や「立ち上がる」といった行為に見られる「中国人の文明観」と関わる記述や、イヤフォンと映画の関わりや、日本之「活弁」などとの比較もユニークである。

第五章から第七章では、伝来直後に混在していた遊興と教養の映画上映環境が次第に分化していったこと、そして後者のような「近代」的な映画上映空間が支配的になっていった過程を明らかにしたが、最終章である第七章では、ポルノグラフィ映画に対する批判や規制にかんする言説を通じて「良き映画観客」が「良き国民」として創出された過程をトレースしている。「肉感」と「医学」との結びつきな筆者独特の視点である。

以上、本論文は全体を通して、多くの資料を丹念に調査した実証的な研究手法によって、観客の映画鑑賞習慣やマナーの実態を明らかにしただけでなく、最終章に見られるように、「良き映画観客」の成立が「良き国民」の創出というネーション形成（国民形成）の動きと如何に連動していたかを読み解いたものである。つまり、単なる映画研究、映画観客成立史研究に止まらず、近代東アジアにおける言文一致運動に代表される「国語」運動などとも関係してくる国民形成論と併行させた研究であり、その意味では映画研究を越えた、他の研究領域との「横断」「交渉」を扱った「文化交渉学」研究の一部とも言えるものである。

今後、映画観客史が語られるとき、本論考は真っ先に読まれるべきものとして学界に寄与すること大なるものがあると確信する、

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。